

校内研修の手引き

達成感のもてる授業の創造

小郡2016

～個を大切にし、連携を意識した授業の創造をめざして～

山口市立小郡中学校 研修部



〈目 次〉

～達成感のもてる授業の創造～

第一章 「生きる力」と「確かな学力」	p 2
1 「自律した学習者」を育てるためのメタ認知	p 2
2 生徒指導と授業改善	p 3
3 信頼と学力向上	p 4
4 本校の学力	p 4
第二章 研修の意義・方向性	p 5
1 研修の意義	p 5
2 本校の学習面での課題	p 6
3 本校の授業改善への取組	p 7
第三章 研修の実践に向けて	p 9
1 「教えて考えさせる授業」とは	p 10
2 「教えて考えさせる授業」の実際	p 11
3 「教えて考えさせる授業」構築の3レベル	p 11
第四章 達成感のもてる授業の創造をめざして [本校の研修概要]	p 12
1 専門性を高めるための、学びと授業形態の再認識 ～授業改善の4視点を基に～	p 12
2 具体的研修方法	p 13
3 研修計画	p 15
参考・引用文献	p 15

〈付 録〉

- 資料1 三面騒議法の手続き
- 資料2 板書型指導案様式
- 資料3 指導案様式
- 資料4 授業評価
- 資料5 自己評価（振り返り）シート 例

第一章 「生きる力」と「確かな学力」

学習指導要領の基本的なねらいとして、「生きる力」を知の側面からとらえたものが「確かな学力」の育成である。課題を解決し、主体的に学習に取り組む態度を養うために、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことを最重要項目ととらえている。変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには、「生きる力」「確かな学力」を育むことが必要である。自ら主体的に学習に取り組む自律した学習者を育てるために、生徒の学習観を変え、効果の得られやすい学習方法を教えていくことが求められる。

1 「自律した学習者」を育てるためのメタ認知

「教えて考えさせる授業」（第三章参照）は認知心理学の見地から開発された教授法である。認知心理学の分野では、結果よりも思考のプロセスを重視する学び方（学習方法）が効果的であるとされる。学び方を生徒に委ねたままでではなく、学力向上の打開策として心理学に基づく学び方指導を導入する必要がある。学び方指導を重視した授業を導入するためには、学校現場にはどのような意識改革が求められるのであろうか。（東京大学大学院植阪友理助教授と元岡山市立灘崎中学校床勝信教諭の対談より *1）

○認知心理学から見た効果の得られやすい3つの学習方法

①「深い認知的方略」

浅い処理は書いたり唱えたりする反復重視の学習方法で、深い処理は意味を理解しながら覚えたり、なぜそうなるのかを考えながら解く、意味理解を重視した学習方法。

例：文章を読むとき自分の知識と結びつけながら読む、
漢字の部首の意味や成り立ちを考えながら覚える、など

②「メタ認知的方略」

自分が分かっていること、分かっていないことをはっきりさせたり、自分の弱点を分析したりするなど、自分の頭の中の働きを客観的に見ながら学習を進める。

例：間違えた問題をもう一度自分で解く、同じ間違いをしないよう、注意点をまとめる

③「外的リソース方略」

図や表、参考書など、自分以外の外的な資源を使いながら問題を解決する方法

例：習ったことを図や表に書いてまとめる、図や表を使って考える

メタ認知とは、自分の認知に対する認知のことである。具体的には①自分の認知的能力についての知識をもつ、②自分の認知過程の状態を把握する、③自分の認知行動を制御する、などの内容を含む。（市川 2008 *2） 学び方を教え、「自律した学習者」を育てるためにはメタ認知を活用し、徒の学習観を授業で意図的に変える必要があり、生徒が変えたことによる達成感や効力感を得ることが重要である。自律した学習者は、つまづいた時に自分で課題を発見し克服できる人であり、効果的な学び方を身に付けておくことで、学校で習わなかった未知の知識・技能に出合った時にも、自分で学ぶことができ、知識・技能を獲得できるであろう。そうした学び続ける姿勢を育てることが、生きる力となる。現在授業の中で行われる「振り返り」活動はまさに、

メタ認知を活用したものであり、授業での理解度を自らが把握し、今後の学習を仕組んでいくか学習マネジメントであり、学力向上への打開策となることが期待される。

また、認知心理学では他人が理解できるように説明できて、はじめて自分が理解できたと考える。言葉だけではなく図や表を使って相手に伝えたり、相手の質問に答えたりすることで、自分自身の理解を深めることができる。このように「学び合い」の場でも認知心理学を活用していくことができる。

2 生徒指導と授業改善

生徒指導の取組と言うと、従来は事後対応が中心であった。国立教育政策研究所による「生徒指導リーフ増刊号」には、とくにいじめに関して、次のように述べられている。

いじめの未然防止のための取組が非常に重要であり、未然防止の基本は、すべての児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加・活躍できる学校づくりを進めていくことから始まる。(※3) 居場所づくりや絆づくりをキーワードに学校づくりを進めていくことにより、すべての児童生徒に集団の一員としての自覚や自信が育まれるならば、仮に児童生徒が様々なストレス（ストレスをもたらす要因）に囲まれていたとしても、いたずらにストレスにとらわれることは減る。そして、互いに認め合える人間関係・学校風土を児童生徒自らがつくりだしていくことができる。

つまり、日々の学校生活の改善から未然防止は始まるといえる。具体的には、わかる授業づくりを進める、すべての児童生徒が参加・活躍できる授業を工夫する、といったことから始まると考えられる。児童生徒にストレスをもたらす最大のストレスは、友人関係にまつわる嫌なできごと、次いで人に負けたくないという過度の競争意識であり、勉強にまつわる嫌なできごとが続く。児童生徒が学校で過ごす中で一番長いのは、授業の時間である。授業が児童生徒のストレスになっていないか、授業の中で児童生徒のストレスを高めていないか、言い換えれば、授業中に児童生徒の不安や不満が高められていないかというのは、授業改善の大きなポイントである。だからこそ、わかる授業づくりを進めることから進めるべきなのである。

特に教師に求められることは、わかる授業づくりである。授業づくりと言うと、学力向上の取組であって、生徒指導の取組とは異なるようだが、すべての児童生徒が授業に参加できる、授業場面で活躍できるための授業改善であれば、学力向上にはもちろん、いじめを始めとした生徒指導上の諸問題の未然防止にもつながる。学力に対する自信のなさや不安、それに伴う消極的・否定的な態度、ひやかしやからかいなどは、児童生徒の学習意欲を低下させ、基礎学力の低下をもたらすことで、さらなる学力への自信のなさや不安を生むという悪循環になるばかりか、生徒指導上の諸問題にも発展しかねない。授業中は授業だけ、生徒指導の取組は授業以外の行事等で、といった考え方は捨てるべきである。

「生徒指導リーフ いじめの未然防止Ⅱ」で紹介されているのが、活動の組み方と働きかけ方による「自己有用感」の育成である。他者から認められている、他者の役に立っているという「自己有用感」を、児童生徒全員が獲得できるような集団体験を提供していくことが必要である。「学び合い」や「支えあい」を授業の中で仕組んでいけるような、協働的な活動などが有効となるであろう。(※4)

3 信頼と学力向上

「学力」と「信頼」の関係に焦点をあて、学力向上を通して信頼を構築する方法、及び校区における人々の信頼を学力向上に活かす方法について簡単に述べてみたい。

学力向上を信頼につなぐ、また、信頼を学力向上につなぐ戦力的な視点は「組織力」・「授業力」・「省察力」である。「組織力」には、学力向上に一体となって向かう組織体制の整備、教員相互が支え合い高め合う質の高い授業研究の習慣化、家庭との連携協力による家庭学習習慣の定着化等が含まれる。「授業力」には、目標・指導・評価の一体化を意識し、言語活動を取り入れた授業づくりや授業改善の日常化が含まれる。「省察力」には、授業における振り返り活動の重視、テストや各種調査データによる課題認知・共有と改善行動の促進等が含まれる（露口 2015 * 5）。

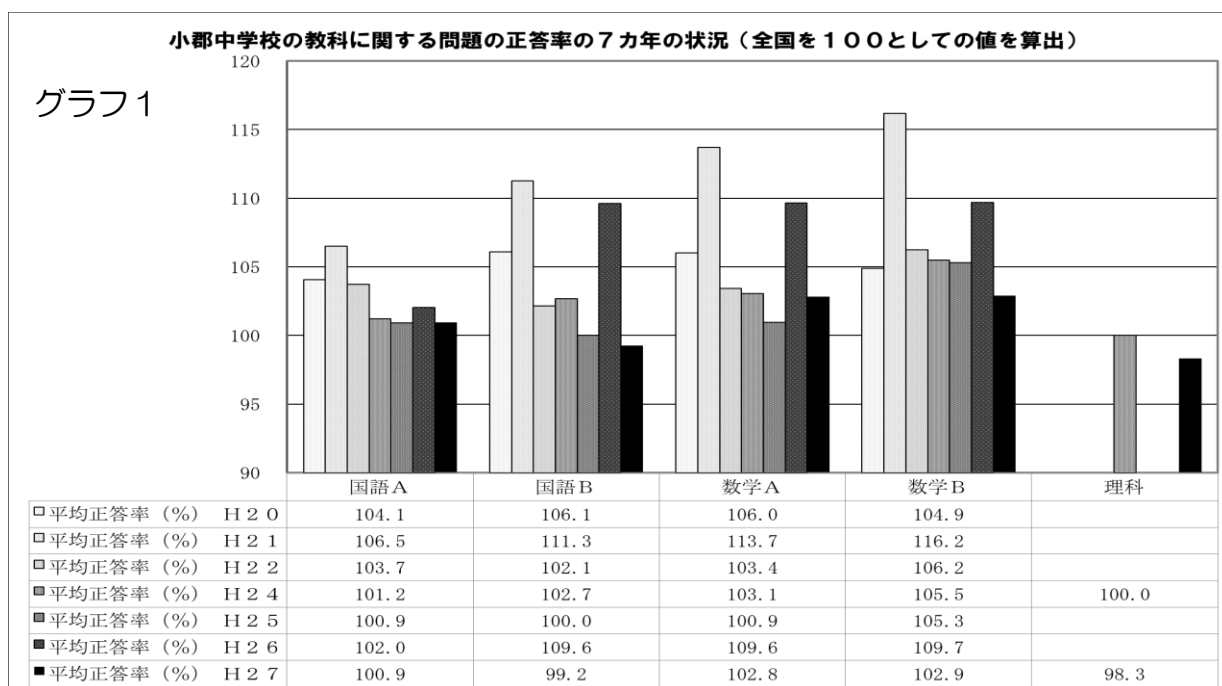
学力の定義として、学力とは「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの」とあり、これらの力の醸成には、「教員相互」「教員と地域住民」「教員と保護者」といった3次元の信頼が強固である必要がある。この信頼が学力向上を育み、学力向上がさらなる信頼へとつながっていく。特に「教員相互」の信頼関係についていえば、授業研究チームの実践が重要であり、目標・課題の共有から始まり、公開授業等での授業準備や指導案作成の支援などの相互支援、授業後の振り返りなど冗長な授業コミュニケーション、最後に困難さの共有があげられる。（露口 2015）つまり、人と人とのつながりが大切となる。

「つながり（信頼関係）」が重要視される場合、授業改善では何を指すべきであろうか。授業構想・授業実践・授業評価における「省察思考」が大いに発揮されるべきであり、各場面において話し合いや、振り返りを行うなどが位置づけられる。（露口 2015）

学習指導要領 第1章 総則にも「つながり」の表記が多くみられ、家庭や地域社会とのつながりだけでなく、学校種間、教育施設、各教科等などの単元・領域、人・時間等多くの場面での「つながり（連携）」が述べられており、今後は連携を意識した研修の取組がさらに重要となる。

4 本校の学力（平成28年度山口市立小郡中学校 学校経営ビジョンより）

グラフ1は、過去8箇年（平成23年度は除く）の全国学力・学習調査の結果である。



過去8箇年（平成23年度は除く）の全国学力・学習調査においては、年度によって多少の優劣はあるものの、これまでいずれの教科についても全国平均をほぼ上回ってきており、本校において生徒の確実な学力定着がなされてきていることが伺える。特に数学科は好成績を修め続けてきており、山口県教委が早くから進めてきた少人数指導加配教員制度が、本校においても成果として着実に実を結んできている。近年は特に、生徒の学習力及び教師の授業力の向上に力点を置いた学校運営を充実させてきており、合わせて子どもたち自らの毎日の真摯な取組が、大きな成果として実を結んできているといえる。

また、生徒の生活適応状況について、11月に実施した生活アンケート（Fit）の結果を示したものが上図であり、対人と環境を合わせた総合適応感では、「適応」の範囲内に95.3%の生徒が入っており、基準値の89.9%と比較して高い数値を示していること、「要確認」の範囲内の1.7%も基準値の4.2%を下回る数値を示していることから、生徒の集団への所属感を高めるための様々な方策やきめ細かな教育相談対応が効果に繋がってきているといえる。「学習適応感」については「適応」が基準値をやや下回り、授業の中での生徒の居場所づくりが引き続き今後の課題である。

分類	側面① Q1.8.15.23 【生活満足】	側面② Q3.10.17.24 【教師支援】	側面③ Q5.12.19 【家庭支援】	側面④ Q2.9.16.22 【友人関係】	側面⑤ Q6.13.20 【社交性】	側面⑥ Q4.11.18.25 【安心感】	側面⑦ Q7.14.21 【学習】	側面①～③ 【環境適応感】	側面④～⑥ 【対人適応感】	側面⑦ 【学習適応感】	側面①～⑦ 【総合適応感】	
												基準値
適応	基準値	92.2%	92.2%	93.1%	90.8%	93.3%	92.0%	92.6%	89.7%	88.7%	92.6%	89.9%
	1年	94.1%	93.7%	93.7%	96.4%	98.6%	95.0%	93.7%	95.0%	93.7%	93.7%	95.5%
	2年	96.0%	94.5%	92.5%	92.0%	96.0%	93.0%	89.4%	94.5%	92.5%	89.4%	94.0%
	3年	95.0%	96.8%	90.8%	97.2%	98.2%	95.0%	92.7%	96.3%	95.0%	92.7%	96.3%
	全校	95.0%	95.0%	92.3%	95.3%	97.6%	94.4%	92.0%	95.3%	93.7%	92.0%	95.3%
要注意 (37以下)	基準値	7.8%	7.8%	6.9%	9.2%	6.7%	8.0%	7.4%	10.3%	11.3%	7.4%	10.1%
	1年	5.9%	6.3%	6.3%	3.6%	1.4%	5.0%	6.3%	5.0%	6.3%	6.3%	4.5%
	2年	4.0%	5.5%	7.5%	8.0%	4.0%	7.0%	10.6%	5.5%	7.5%	10.6%	6.0%
	3年	5.0%	3.2%	9.2%	2.8%	1.8%	5.0%	7.3%	3.7%	5.0%	7.3%	3.7%
	全校	5.0%	5.0%	7.7%	4.8%	2.4%	5.7%	8.1%	4.7%	6.3%	8.1%	4.7%
要確認 (32以下)	基準値	3.0%	2.8%	2.0%	2.2%	2.3%	2.3%	3.0%	4.4%	4.9%	3.0%	4.2%
	1年	1.4%	2.3%	1.4%	1.4%	0.9%	1.8%	2.7%	2.3%	2.7%	2.7%	1.8%
	2年	2.0%	2.0%	2.0%	0.5%	1.0%	2.0%	4.5%	3.0%	3.5%	4.5%	2.5%
	3年	1.4%	0.9%	2.3%	0.5%	0.9%	1.4%	2.8%	1.4%	1.4%	2.8%	0.9%
	全校	1.6%	1.7%	1.9%	0.8%	0.9%	1.7%	3.3%	2.2%	2.5%	3.3%	1.7%

表1 生活アンケート(Fit)集計結果

第二章 研修の意義・方向性

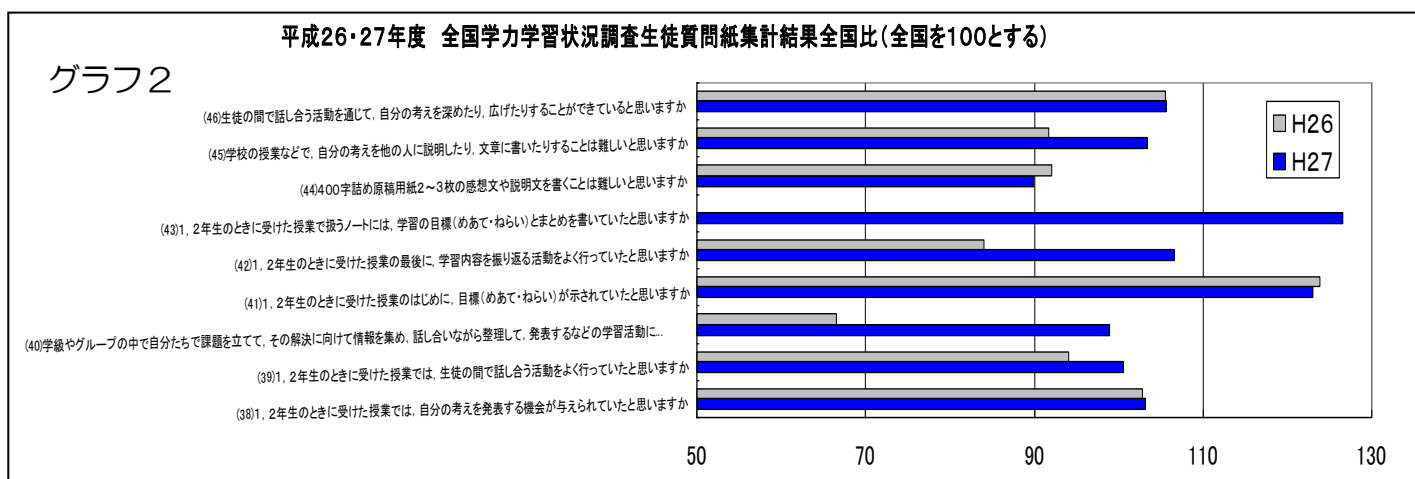
1 研修の意義

教育公務員特例法には 第21条1「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養につとめなければならない。」 2「教育公務員の任命権者は、教育公務員の研修について、それに要する施設、研修を奨励するための方途その他研修に関する計画を樹立し、その実施に努めなければならない。」とある。中央教育審議会答申にある「学習指導要領の改善について（H20）」での基本理念は「生きる力」・「確かな学力」であり、学力向上に向けた授業改善の職責を全うすべく、研修を行う義務を私たちは有している。

2 本校の学習面での課題

本校の学力については前述したように、全国レベルより上位を占め、生徒の確実な学力定着がなされてきていることが伺える。しかし、昨年度は国語、数学両教科においてA、B問題とも下がっており、基礎・基本を重視しつつ、応用的な発展問題にも力を入れていく必要がある。一方で、生活アンケート(Fit)からは、適応の範囲内にいる生徒が昨年の90.9%よりは上がり、92.0%であるが、基準値の92.6%よりは若干下回っており、学習面で不安を抱えている生徒が依然いるという現状である。特に項目別に見ると「授業についていけないのではないかと不安になる」と答えた生徒が34.1%（昨年度37.5%）、「授業の進み方が早いと感じることが多い」と答えた生徒が32.9%（昨年度31.9%）、「努力したわりに成績がのびないと感じる」と答えた生徒が38.2%（昨年度43.4%）である。昨年度よりは上昇傾向にあるが、居場所作りプランと連動し、生徒一人ひとりの個に応じた授業を提供し、授業内での居場所の確保が必要となる。

グラフ2は、昨年度・一昨年度の全国学力・学習状況調査生徒質問紙集計結果の学習に関する項目である。特筆すべきは、「(43)1, 2年生のときに受けた授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思いますか」という新しい項目において、126(全国レベル100)「(42)1, 2年生のときに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」が一昨年の84から昨年は106を記録し、全国レベルを上回った。めあて・ねらいや振り返りの定着が十分図られていることが伺える。また、「(39)1, 2年生のときに受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」一昨年94から昨年は100、「(40)学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか」は一昨年の66から昨年の98へ飛躍するなど、話し合い活動が充実していることがうかがえる。しかし、「(45)学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか」は一昨年の91から昨年の103に増えており、本校の課題である表現力に関しては今後さらに力を入れていく必要がある。



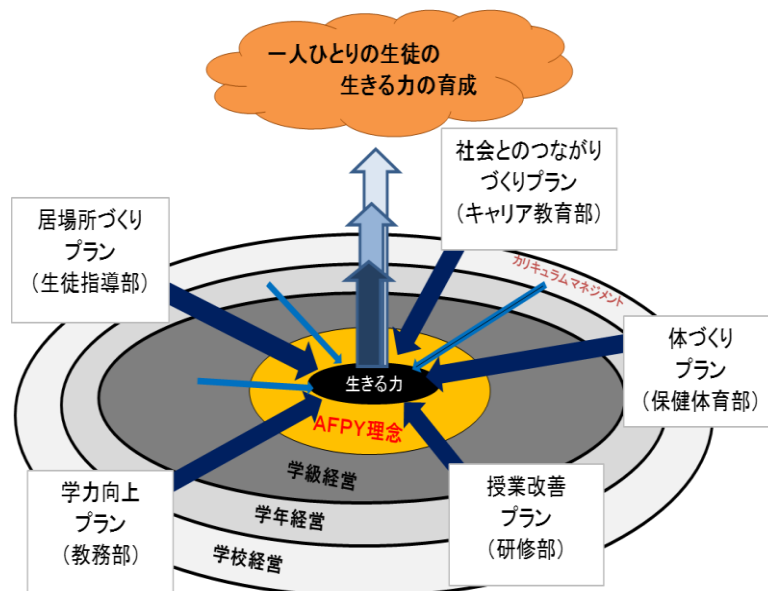
以上のように研修3年目を迎え、ねらい・めあてや振り返り活動は浸透し、グループでの協働活動は進化しているといえる。改めて、基礎・基本を重視しつつ、さらに自分の意見や考えを述べるようなアクティブな授業や、教え合うことでさらにお互いの理解を深めるような授業を展開

する必要がある。さらに配慮を要する生徒への個別の対応も求められる。その際にはICTや資料を活用するなど、視覚を重視し、居場所を感じることができない生徒にも興味をもって授業に取り組めるような工夫が必要である。また、自分の理解度を確認して達成感を感じることが出来る場も重要となるであろう。本研修では、引き続き学習の基盤となる基礎・基本を確実に教えた上で、さらに発展的・実践的な授業を展開していけるような授業の創造を目指し、授業改善に向け研修を深めていきたいと考える。特に、「考える」場面を重要視し、ICTを活用するなど生徒の個性に応じた授業技術を研修していきたい。

3 本校の授業改善への取組

図1は本校「生きる力」育成プロジェクトで、研修部は「授業改善」を担当している。各プランが横風を送り、上昇気流となって生徒がたくましく変容し成長していくという構造である。

図1 小郡中学校「生きる力」育成プロジェクト



授業改善プランでは、学力の向上を図るためには授業を改善し、教員の資質向上を目指すことが必要であると考え、軸足を「授業改善」に置いた研修を行っている。PDCAサイクルに基づいて研修を進め、授業では、基礎・基本を重視しつつ、問題解決力・活用力を身に付けていくことが必要であると考え、基礎・基本の定着と活用を促す効果的な授業設計を構築していった。

本研修を実現していくために、本校では東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授が提唱する、「教えて考えさせる授業」(第三章参照)を取り入れ、授業改善の4視点を定め、達成に向けて全教員で取り組んでいる。

(1) 昨年の研究の取組

本校では、一昨年度から独自の授業改善プランを作成し(図2)、PDCAサイクルに基づいて研修を行っている。特に授業では、基礎・基本を重視しつつ、問題解決力・活用力を身に付けていくことが必要であると考え、基礎・基本の定着と活用を促す効果的な授業の構築をめざした。この理念を実現するために昨年度も、東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授が提唱する、「教えて考えさせる授業」を基調として校内研修を進めている。二年を経た現在、さらに校内研修を活性

化させるため、取組が生徒の学力向上へとつながり、信頼関係が築かれるという「学力向上と信頼構築」に焦点を当て、より戦略的に校内研修を進めたいと考えている。



（2） 昨年度の授業研究会の実践内容

本研究では、授業改善の4視点（8項目）を設け、調査・分析(C)を行い、改善(A)のめやすとしている。授業研究会を通して、4視点が実践されているか協議を行い、その都度共通の課題を設け、日々の授業改善の目標として全員で共有した。表2は授業研究会の概要である。

表2

研究会	クラス・授業者	よい点・工夫した点	改善点	課題（目標）
第1回 (7/9) 家庭科	1年3組 佐伯法子 (ランチョンマット)	・目標がはっきりし、見通しが立っていた。 (視点1) ・視覚的な説明(視点2) ・生徒同士で教えあっていた。(視点3)	・デザインを考えるアドバイスがほしい。 (視点3) ・モニタリングが必要 (視点4)	考えを深めるための工夫をしよう。 (視点3)
第2回 (9/16) 数学科	3年2組 堀永京子 (二次方程式)	・カレンダーを使った分かりやすい説明 (視点2) ・ペアワークによる理解確認 (視点3)	・ワークシートの工夫 ・全体を考慮した、説明の時間配分(視点2) ・苦手な生徒への配慮 (視点4)	理解深化課題をやってみよう。 (視点3)
第3回 (10/7) 英語科	3年4組 村岡晶子、中村匡宏 (現在分詞の後置修飾)	・分かりやすい説明 (視点2) ・理解確認による十分な練習 (視点3) ・やりがいのある理解深化課題(視点3)	・全体を考慮した、説明の時間配分(視点2) ・さらに考える内容を ・表現活動の充実 (視点3)	理解深化課題をやってみよう (視点3)
第4回 (11/11) 理科	2年4組 宮野義基 (電圧)	・ICT、機材による分かりやすい説明(視点2) ・グループ活動の充実 ・教科書の先をいく課題 (視点3)	・振り返りの充実 (視点1) ・グループ活動の役割 (視点3) ・データの活用(視点4)	分かりやすい説明を行おう (視点2)
第5回 (12/4) 国語科	1年5組 黒田莉々 (比喩)	・ワークシートを使った分かりやすい説明 (視点2) ・作文による事前の準備 ・グループワークの工夫 (視点3) ・板書の工夫(視点4)	・説明が長く受身的(視点2) ・深化課題に行くための理解確認の充実 ・意見の共有 ・時間配分(視点3)	理解深化につながるために、理解確認での内容(活動)を充実させよう(視点3)

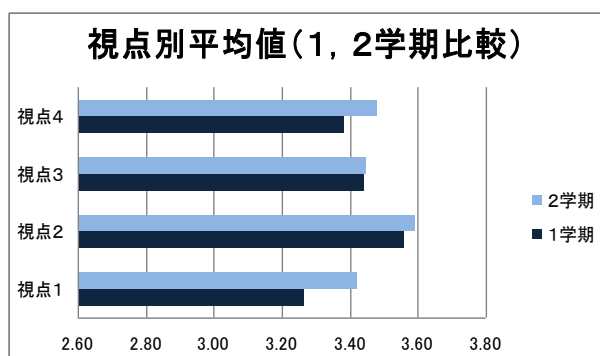
第6回 (2/10) 社会科	1年3組 長岡拓郎 (戦乱から全国統一)	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の茶室再現した、興味深い理解確認 ・ロールプレイによる理解確認 ・表現力の定着(視点3) ・個々への助言、褒め言葉を多用(視点4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいが定まらない(視点1) ・説明から確認、深化への一貫性(視点2, 3) 	説明から確認、深化への流れを大切にしよう (視点2, 3)
----------------------	----------------------------	---	--	----------------------------------

(3) 結果・分析

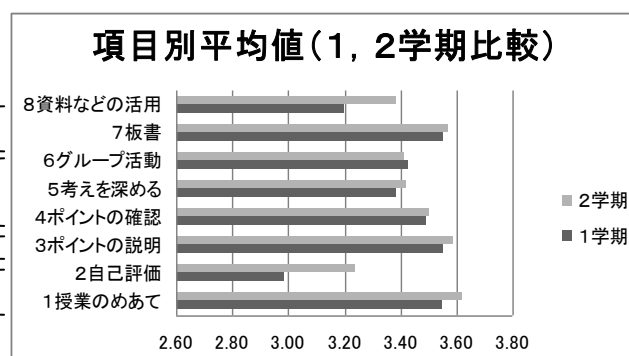
4視点(8項目)に基づいた授業評価を4段階で行い、分析した(グラフ3, 4)。全体的に一学期と比較してほとんどの項目が上がっており、授業改善が効果的に進んでいると考える。

項目別では、資料などの活用や自己評価が伸びており、説明や授業のめあてが高い。しかし自己評価に関しては伸びてはいるものの、全体と比較すると依然低い状況である。

グラフ3



グラフ4



(4) 考察と今後の課題

課題としては、昨年度の研修主題である「考える」活動に重点を置いた視点3の向上があげられる。また、自己評価に関しても伸びが見られるものの全体から見ると低いことから、今年度はメタ認知の視点を活用し強化していく必要がある。しかし、全体的に得点が伸びていることや、学力検査の結果、保護者による学校アンケート(P-trust)による信頼係数の向上などからも、学力向上に伴った信頼感の醸成が伺える。さらに教員間の信頼関係を高め、今年度もより活性化した研修を行っていきたい。

第三章 研修の実践に向けて

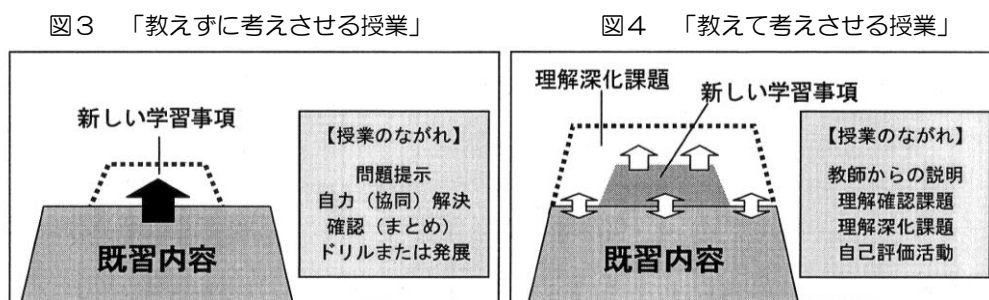
本校では授業改善に力を入れ、昨年度は校内研修の主題を「考えを深めることにより、達成感もてる授業の創造」とし、一昨年の「課題を明確にすること」に加え、理解を深めるために「考える」ことを重視した、より発展的な授業を実践してきた。全国学力状況調査においてA問題、B問題ともに課題が見られることから、応用力の根底となる基礎・基本を大切に、問題解決力・活用力を身に付けていくこと、「ねらい」を明確にし、自己評価を授業の一部とすることに焦点を当てた体系的な授業設計を構築していきたいと考え、この理念を実現するた

めに、東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授が提唱する、「教えて考えさせる授業」を基調とした校内研修を進めている。

今年度は主題を「生徒一人ひとりが、達成感のもてる授業の創造」とし、「自分の理解状況を自己診断できるような『メタ認知』の力を身に付けると、授業に達成感が持て、学力が向上する」という仮説のもと、「教えて考えさせる授業」を着実に推進していきたい。授業内で居場所をつくるため、生徒一人ひとりの個性に応じたきめ細やかな授業の創造をめざしている。

1 「教えて考えさせる授業」とは (*6)

東京大学大学院教育学研究科の市川伸一教授によって、「教えることのみ授業」と「教えずに考えさせる授業（問題解決型）（図3）」の折衷案として考案された、構造化された授業である。新しい学習事項にあたる部分は「教師からの説明」によって教えることから入り、その後に「理解を確認するような課題」「発展的な課題」「自己評価活動」などを通して、理解を深めていくことをねらう（図4）。「教えられて理解し、さらにその先を考えていく授業」である。



学校の授業には、「予習－授業－復習」を通じて目標となる知識や技能を身に付ける「習得サイクルの学習」と、自らのテーマ、興味・関心に応じて課題を設定し、それを追究する「探究サイクルの学習」がある。習得サイクルの授業では、目標を設定し、教材研究を行い、課題を与えるのは教師である。一方、探究の授業では、子ども自身が課題を決めて、計画を立て遂行していく。教師はそれを支援する役割になる。それぞれのサイクルの学習は、相互に独立して動くのではなく、習得サイクルで得た知識や技能が探究サイクルにおいて生かされ、また逆に、探究サイクルの学習を行っていくと、あらためて基礎・基本的な知識・技能の必要性に気づいて、習得サイクルの学習に戻るというリンク（結びつき）が生じる（図5）。

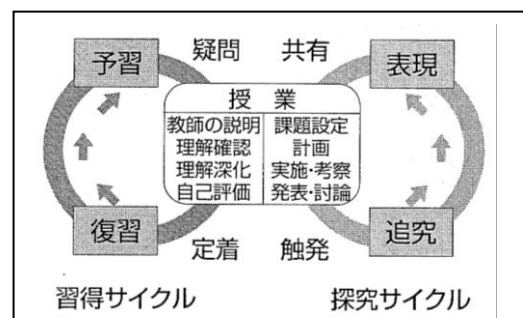


図5 習得と探究の学習モデル

習得の授業のコンセプトとして大切な点は「理解」を重視した授業だということである。習得の授業においては、「教師の説明」「理解確認」「理解深化」「自己評価」という4段階で進めることが授業設計の原理である。「教科書を活用し、教科書を超える授業」づくりが求められる。（*6）

2 「教えて考えさせる授業」の実際

① 教師からの説明（「教える」の部分）

- 教科書を開けば出ているような基本事項は教師から共通に教える。
- 教材、教具、操作活動等を工夫したわかりやすい教え方を心がける。
- 教師主導で説明するにしても、子どもたちと対話したり、ときおり発言や挙手を通じて理解状態をモニターしたりする姿勢をもつ。

② 理解確認課題（「考えさせる」の第1ステップ）

- 「教科書や教師の説明したことが理解できているか」を確認する子どもどうしの説明活動や、教えあい活動を取り入れる。
- 問題を解いているわけではないが、考えないとできない活動として重視する。

③ 理解深化課題（「考えさせる」の第2ステップ）

- いわゆる問題解決部分
- 多くの子どもが誤解していそうな問題や、教えられたことを使って考えさせる発展的な課題を用意する（いわゆるジャンプ問題）。
- 小グループによる共同的問題解決の場面により、参加意識を高め、コミュニケーションを促す。

④ 自己評価活動（「考えさせる」の第3ステップ）

- 「授業でわかったこと」「まだよくわからないこと」を記述させたり、「質問カード」によって、疑問を提出したりすることを促す。
- 子どものメタ認知を促すとともに、教師が授業をどう展開していくかを考えるために活用する。

（※メタ認知とは自分の認知に対する認知のこと。具体的には①自分の認知的能力についての知識をもつ、②自分の認知過程の状態を把握する、③部分の認知行動を制御する、などの内容を含む。）

3 「教えて考えさせる授業」構築の3レベル（*2）

段階レベル	方針レベル	教材・教示・課題レベル（例）
教える		
（予習）	授業の概略と疑問点を明らかに	<ul style="list-style-type: none"> ・通読してわからないところに付箋を貼る ・まとめをつくる／簡単な例題を解く
教師からの説明	教材・教具・説明の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の活用（音読／図表の利用） ・具体物やアニメーションによる提示

		<ul style="list-style-type: none"> ・モデルによる演示 ・ポイント、コツなどの押さえ
	対話的な説明	<ul style="list-style-type: none"> ・代表生徒との対話 ・答えだけでなく、その理由を確認 ・挙手による、賛成者・反対者の確認
考えさせる		
理解確認	疑問点の明確化	・教科書やノートに付箋を貼っておく
	生徒自身の説明	・ペアやグループでお互い説明
	教え合い活動	・わかったという生徒による教示
理解深化	誤りそうな問題	<ul style="list-style-type: none"> ・経験上、生徒の誤解が多い問題 ・間違い発見課題
	応用・発展的な問題	<ul style="list-style-type: none"> ・より一般的な法則への拡張 ・生徒による問題づくり ・個々の知識・技能を活用した課題
	試行錯誤による技能の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・実技教科でのコツの体得 ・グループでの相互評価やアドバイス
自己評価	理解状態の表現	<ul style="list-style-type: none"> ・「わかったこと」「わからないこと」 (生徒のメタ認知を促す)

第四章 個を大切に、連携を意識した授業の創造をめざして [本校の研修概要]

平成28年度 小郡中学校 研究主題

生徒一人ひとりが、達成感のもてる授業の創造

1 専門性を高めるための、学びと授業形態の再認識 ～学力向上、生徒指導の充実をめざして授業改善の4視点を基に～

- ①課題設定や自己評価を行う
「ねらい」を明確にし、理解状態を生徒が自己評価することで達成感をもたせる。
- ②教える
基礎・基本の理解が定着してから課題解決問題に取り組む。
- ③考えさせる
生徒同士の協同活動によって理解を確認し、課題解決によって理解を深める。
- ④生徒の困難度（困り感）を補い授業が円滑に進む手だてを講じる。★
困難度の予測、支援体制、アクティブ・ラーニング、モニタリング、
わかりやすい板書、ICTの活用

- ※ ④の個への支援 の強化を図る。
- ※ アクティブ・ラーニング（*8）・・・グローバル化や技術革新が進む中、自ら課題を発見し、その解決に向けて取り組む力を育むため、身に付けた知識を活用したり、解決策を自ら探求したりする主体性を養う授業。一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味でのあらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

2 具体的研修方法

(1) 授業改善

- ① 市川伸一氏の「教えて考えさせる授業」の理念を取り入れ授業改善を図る。

「教えて考えさせる授業」の四段階

- 1 〈教える〉 未習の基礎的・基本的事項は、教師からわかりやすくていねいに説明する。（説明・めあての確認）
- 2 〈考えさせる①〉 生徒同士の説明活動や教えあい活動によって、教えられた学習内容の理解を確認させる。（理解確認課題）
- 3 〈考えさせる②〉 教えられたことを活用する課題の協同解決で、理解をふかめさせる。（理解深化課題）
- 4 〈考えさせる③〉 「わかったこと」「わからないこと」を表現し、理解状態を自己評価させる。（自己評価活動）

- ・手引きの周知徹底、共通理解 ・先進校への視察 ・教科部会の実施
- ② 「授業改善の4視点」を基にした授業改善を行う。
- ・授業評価の充実（毎時間実施、教科部会で評価項目を決め、検証する）
 - ・ICTの活用
- ③ 各教科1名による研究授業（年間6回）と、全教員による授業公開を実施する。

※以下（2）参照

- ・特別支援の見地から、交流学习での研究授業も取り入れる。
 - ・一人一授業（2学期末までに実施）
- ④ 研究授業後、研究協議を実施する。
- ・生徒一人ひとりに焦点を当てた協議の工夫
- ⑤ 小中連携やユニット型研修を実施する。
- ・小中学力向上部会の実施
 - ・小郡中学校学校運営協議会との合同研修会

(2) 授業研究・研究協議の方法

学校は、教師たちが学び育ち合う場所でもある。よりよい学校づくりをするためには、すべての教師が授業を公開して、専門家として成長し合う「同僚性」を校内に築かなければならない。

- ① 研究授業は、各教科（国、数、社、理、英、技能教科）から1名が授業を提供できるよう計画的に実施する。三面騒議法などにより、「教えて考えさせる授業」の理念に基づいて授業を分析する研究協議を行う。
 ※三面騒議法・・・提案授業を見た参加者が「よいと思った点」「問題と改善策」「応用できそうなこと」をそれぞれ3色の付箋に貼って討論する方法。
- ② 教科部会を学期に約2回設け、参観した授業や日ごろの授業について意見交換や検証を行う。お互いの授業の良さや技術を見つけ、認め合いながら参考にしたり、自分の授業に取り入れたりすることを主眼として、授業参観や研究協議を行い、指導力向上に資するものとする。
- ③ 小学校との連携を学力向上面でも充実させ、相互の授業参観や連携授業等を計画的に実施する。
- ④ 小郡中学校学校運営協議会との合同研修会を行う。(ユニット型研修)
 ※ユニット型研修（*9）・・・コミュニティ・スクールなど、家庭や地域との連携を活用した研修。

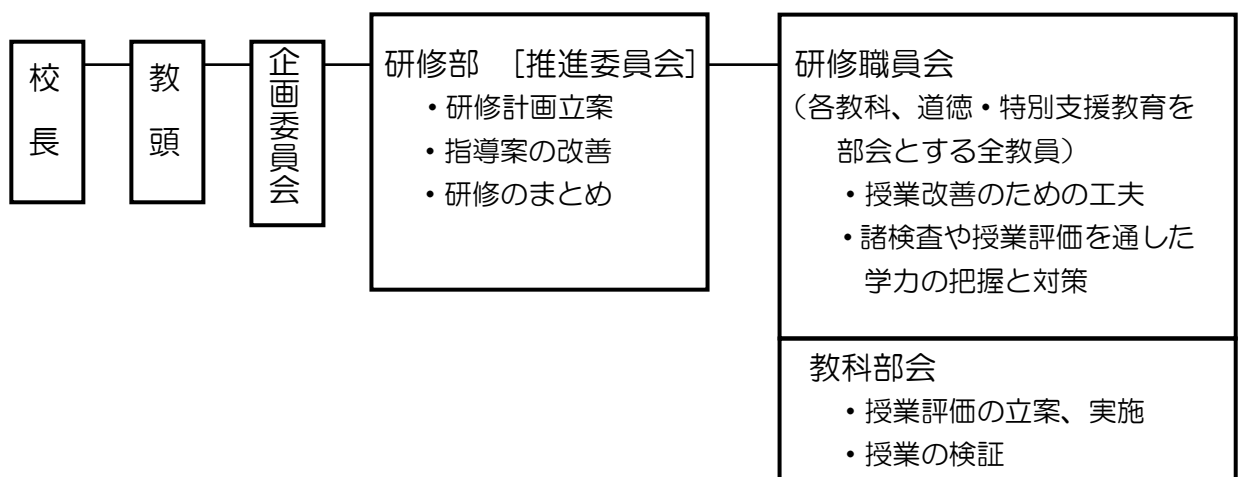
(3) 諸検査の結果の分析・活用

- ① 毎時間、授業評価を行い、成果を検証する。(教科内で評価項目を検討、組織的な実施)
 例：めあては確認されているか／内容は分かりやすいか／自分の考えを表現することができたか／グループ活動はあったか
- ② 3年生の全国学力学習状況調査、1・2年生の学力定着状況確認問題、学力支援プログラム学期末問題などの分析を通して、学力の状況や変化をつかむとともに、学年や個々の生徒の学力の状況に対応する学習指導や支援体制について研修する。
- ③ Fit（生活アンケート）、いじめアンケート（学習項目）を検証する。
- ④ 協議の振り返りを通して、研究協議の内容の充実をはかる。

う

評価基準（4点）：視点1～「いじめアンケート」／ 視点2～「授業アンケート」
 視点3～各テストの4月と10月の比較
 視点4～「Fit（生活アンケート）」
 ※アンケート、テストについては、前回（昨年）と比較し、
 向上していれば4 / 同じであれば3 / 以下であれば、2, 1とする

(4) 研修組織



3 研修計画

月	日	研修内容・活動
4月	2～5日 19日	研修計画及び研修内容の計画（企画委員会・研修部・職員会） 研修計画立案、研修先進校視察（研修部） 全国学力・学習状況調査 プランの評価方法について検討、授業改善の方法立案（研修部）
5月	上旬	「校内研修の手引き」の作成 「教えて考えさせる授業」授業研究会参加
6月	8日 13～17日 22日	第1回研修職員会 ・AFPY研修 ・研修計画及び研修内容の提示 オープンスクール 授業、評価について検討（教科部会）
7月	13日 学期末	第2回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議 学習支援プログラム評価問題
8月	18日	校内研修日 ・各種テストの分析、課題の把握、今後の対策の検討（教科部会）
9月	21日	第3回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議
10月	5日 12日	第4回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議 後半の研修に向けて、再確認（研修部）
11月	1日～11日 9日（予定）	オープンスクール ・人権参観日 第5回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議
12月	5日 学期末	第6回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議 生徒による授業評価と分析（各教科）
1月	11日 18日	各種テストの分析、課題の把握、今後の対策の検討（教科部会） 研修のまとめ（研修部）
2月	8日	第7回研修職員会（ユニット型研修） ・授業発表、研究協議、研修のまとめ 研修の反省と次年度の研修計画立案（研修部）
3月	学年末	生徒による授業評価と分析（各教科）

〈参考・引用文献〉

- * 1 V I E W 2 1 【中学校版】 Vol. 3 2013 年
- * 2 市川伸一 『『教えて考えさせる授業』を創る』 図書文化 2008 年
- * 3 文部科学省国立教育政策研究所 「生徒指導リーフ増刊号 いじめのない学校づくり」 Leaves. 1 2015 年
- * 4 文部科学省国立教育政策研究所 「生徒指導リーフ いじめの未然防止Ⅱ」 2015 年
- * 5 露口健司 「学力向上と信頼構築」 ぎょうせい 2015 年
- * 6 市川伸一 「新学習指導要領対応 教えて考えさせる授業 中学校」 図書文化 2012 年
- * 7 市川伸一 『『教えて考えさせる授業』の挑戦』 明治図書 2013 年
- * 8 小林昭文 「アクティブ・ラーニング入門」 産業能率大学出版部 2015 年
- * 9 やまぐちっ子 学力向上だより 第66号 2015 年